

開国と信徒発見
解禁とキリスト教の再興

開国を機に始まったカトリックの宣教と新たな教会堂の建設

フランス革命やナポレオン戦争による混乱や宗教からの脱却の流れを経て、フランスではカトリック復興の気運が高まっていた。1838年、ローマ教皇庁は当時既にベトナムや中国で活動を行っていたパリ外国宣教会に日本での再宣教を委託した。1844年には日本に近い琉球の島々（沖縄）に宣教師が滞在し、布教の機会をうかがっていた。

19世紀になると、産業革命に後押しされ、西洋列強の世界進出が拡大した。1854年、日本はアメリカの圧力により鎖国政策を放棄した。1858年には西洋諸国と通商条約を締結し、1859年に函館、神奈川、長崎の港が開かれた。

パリ外国宣教会のブリュダンス・ジラル神父は当初フランス公使の通訳として来日した。1863年、ルイ・フューレ神父が横浜から長崎に入り、数か月後にベルナル・ブティジャン神父もその後を追った。開国をきっかけに、ローマ教皇ピウス10世は1597年に長崎で処刑された26人の殉教者を列聖した。長崎での宣教が再開され、新たな教会堂建設計画が始められた。

（挿画：庄司好孝）